

神戸女学院高等学部3年生の 生活意識について

岡 本 佳 子

はじめに

1986年（昭和61年）4月1日より男女雇用機会均等法が施行され、今後の女性の生き方や考え方に大きな影響を与えることが予想される。多様化された現在の社会環境の中でどのように生きて行くかは、個々の女性に課せられた課題であろう。

自分の進路をほぼ決定したと思われる段階の神戸女学院高等学部3年生を対象に質問紙により、高校生活、進路、職業観、結婚、男性観・女性観、女性のライフパターンに関する調査を行ったので報告する。

調査対象および調査方法

調査対象は神戸女学院高等学部3年生130名である。対象校は兵庫県西宮市にあり、中学高校6か年間の一貫教育を行っているキリスト教主義の私立学校である。1988年度（昭和63年度）で第106回の卒業生を送りだしている。なお同校は毎年卒業生全員が進学している。1988年度の進学先は同系列の神戸女学院大学へ約53%、他大学へ約47%であった。他大学進学者の内訳は約7割の者が国立大学へ、約3割の者が私立大学への進学であった。

調査は古崎の質問紙¹⁾を用いて1987年10月に行われた。回収率は100%であった。集計の結果は130名を100とした回答数の比率(%)で示されている。なお本調査結果を古崎による札幌市内女子高校生の結果¹⁾と比較することを試

みた。すなわち神戸女学院高等学部の調査結果(%)と札幌市内において学力で最も類似度が高いと思われる公立高校A群(4校—282名;以下A群と略す)ならびに公立・私立高校総計(20校—1318名;以下全体群と略す)の3学校群の各質問に対する回答数の比率(%)の有意差をみた。検定には χ^2 検定法を適用した。学校群間に有意差の認められた項目については註に記されている。それ故、註に有意差が認められたと明記されていない項目は調査対象の女子高校生に共通の生活意識とみなして差し支えないと思われる。

対象者の属性理解を助けるために両親の最終学歴を紹介する。父親は「大学卒(69.2%) + 大学院卒(16.2%)」が85.4%であり、母親は「大学卒(44.6%) + 短大・高専卒(18.5%)」が63.1%、ついで「高等学校卒」が26.2%であった²⁾。

結果および考察

1 高校生活について

1.1 高校選択の動機

第1回答でみると「校風や教育方針がしっかりしている高校」と答えた者が37.7%を占めていた。ついで「将来必要な教養や知識がえられる高校」が13.1%であった。高校選択の動機については、神戸女学院高等学部は中学部入学時にすでに選抜試験が行なわれていることを考慮すると、中学部選択の動機とみなす方が適切かもしれない。選択肢は異なっているが神戸女学院中学部選択の動機³⁾は、1980年1年生(136名)の場合、「英語教育がさかん」が51.5%、「自然環境がすぐれている」が36.8%、「家族や知人のすすめ」が29.4%であった⁴⁾。

1.2 高校生活の満足度

高校生活に「満足している(35.4%) + だいたい満足している(44.6%)」と答えた者を併せると80.0%を占めていた。選択肢は異なっているが10年前の神戸女学院高等学部3年生(134名)の高校生活³⁾は、「期待していたとおり楽し

い」が17.9%、「こんな程度だと思う」が56.7%、「苦しいけれど有意義だと思う」が3.7%で、78.3%の者がほぼ満足していた⁹⁾。従って神戸女学院高等学部生徒の高校生活満足度は10年前も現在も非常に高いと評価できるだろう。

1.3 生きがいを感じる時

若者らしく「スポーツや趣味にうち込んでいるとき」(43.1%)や「友人や仲間といるとき」(19.2%)がある一方、「他人にわずらわされず、一人であるとき」が6.2%、「どんな時でも感じない」が4.6%いるのは問題である。

2 進路について

2.1 希望する進路

就職して働きながら学ぶ就職進学希望者1名を除いた残り全員が進学を希望していた。それは1.1高校選択の動機と呼応するものであろう。就職希望者は札幌市内高校のいずれの高校群にも存在していた¹⁾が、神戸女学院高等学部では皆無であった⁹⁾。ちなみに10年前の高等学部3年生についても就職希望者は皆無であった⁹⁾。

2.2 進学希望者の進路

2.2.A 受けた教育課程

62.5%が「4年制大学まで」と答えており、ついで「大学院まで」が18.0%、「外国留学」が9.4%であった。「わからない」と答えた者が3.9%あった⁷⁾。

2.2.B 大学進学動機(3つまで記入)

第1回答でみると、「幅広い豊かな教養を身につけたいから」と答えた者が41.4%、「専門的な知識や技術を身につけたいから」と答えた者が33.6%あり、それらの2項目(上位2位)で75.0%を占めていた。「両親やまわりの人のすすめ」あるいは「結婚に有利だと思う」と答えた者は0%であった。第2回答では第1回答の理由に加えて「希望する就職に有利だと思う」、「良い友人を得たいから」と答えた者がそれぞれ16.4%あった。

2.2.C 大学または学部・学科の志望基準(3つまで記入)

第1回答では「自分の適性や関心にあっている」と答えた者が60.9%で一番多かった。ついて「自分の成績や学力にあっている」(11.7%)、「就職に有利」(8.6%)、「校風や伝統が自分にあっている」(7.8%)の順に多かった。第2回答では「自分の成績や学力にあっている」と答えた者が29.7%あり、「校風や伝統が自分にあっている」が16.4%、「自分の適性や関心にあっている」、「施設が充実し環境にめぐまれている」がそれぞれ15.6%を占めていた。なお第1回答において、「有名な教員がそろっている」、「大都市にある」、「親等のすすめ」と答えた者はほとんど0%に近く、「施設が充実し環境にめぐまれている」、「知名度や社会的評価が高い」と答えた者は数%以下であった。以上のことから神戸女学院高等学部3年生の進路は、将来の就職を考慮しながら、ひとりひとりの適性や関心あるいは学力に応じて選択されているといえる。

3 職業観について

3.1 望ましい仕事

「自分の能力が思いきり発揮できる仕事」と答えた者が73.1%と圧倒的に多く、つぎは「仲間と楽しく過ごせるような仕事」が9.2%、「世の中のためになる仕事」が8.5%であった。神戸女学院高等学部3年生は能力を発揮して職業を自己実現の手段としたいという希望が強いことを示している。

3.2 つきたい職業

表1に希望する職業について10位まで(100%)を挙げた。「わからない」(41.5%)と答えた者が最も多く、2.4人に1人の割合であった。2.2.B大学等に進学する動機の第2、第3回答のなかで「大学に入ってから将来の進路を考えたい」がおのおの1割強を占めていた理由がうなずけるのである。神戸女学院高等学部3年生は9割の者が卒後就職を希望し(6女性のライフパターン参照)、それなりの職業観を持ってはいるが、4割の者が将来の職業をイメージできない段階にあると考えられる。

第2位以下は「教員・研究員」(11.5%)、「医師関係」(7.7%)、「ガイド・通

表1 希望する職業

(n=130)

順位	職業	%
1	わからない	41.5
2	教員・研究員	11.5
3	医師・歯科医・獣医	7.7
4	ガイド・通訳・翻訳・スチュワーデス	6.9
5	マスコミ関係	6.2
6	ピアノ・エレクトーン教師	5.4
6	一般事務	5.4
7	文筆業・イラストレーター・編集	3.1
8	薬剤師・薬品関係	2.3
8	秘書	2.3
8	芸能関係	2.3
9	栄養士	1.5
9	幼稚園教諭・保育	1.5
9	看護婦	1.5
10	公務員	0.8

訳など」(6.9%)、「マスコミ関係」(6.2%)の順であった。専門的技術や資格あるいは経験が評価される職業が多く入っていることがわかる。

以上のことから2.2.C大学受験時の志望基準と併せて考えるとき、可能な分野で自己の能力をのばして自己実現できることを期待しているといえる。

3.3 女性は男性に比べて不利か

「就職に関して女性は男性に比べて不利だと思うか」という問いに対して「不利だと思う」と答えた者は65.4%、「どちらともいえない」と答えた者は23.1%で、「不利だとは思わない」は6.9%あった。就職に関して男女対等期待が強いといえる。

3.4 女性が不利だと思う理由

「社会や企業のしくみが男性に有利にできているから」と答えた者が51.8%あった。「男性が女性に対して偏見を持っているから」の12.9%を併せると、就職に関して女性が不利だと思うのを、男性社会の理由にする者が64.7%あった。他方、「長続きしないとみられているから」が18.8%、「意欲や責任感が乏

しいとみられているから」が9.4%など先輩の女性の側の問題にする者が30.6%あった。女性自身以外の責任と女性自身の責任をあげながら、就職に関して女性が男性にくらべて不利だと思うのは前者の方が後者よりも大きいと答えていた。

3.5 これからの世の中は

これからの世の中は、「学歴よりも本人の才能や能力が重視されると思うか」という問いに対して「そう思う(30.0%) + そう思いたい(53.1%)」と答えた者は83.1%、「年功序列よりも能力重視の社会になるだろう」という問いに対して「そう思う(41.5%) + そう思いたい(36.2%)」と答えた者は77.7%、「仕事よりも家庭や個人の生活を大切にする人が多くなるだろう」という問いに対して「そう思う(36.2%) + そう思いたい(16.9%)」と答えた者は53.1%であった。

3.6 資格や免許取得について

資格や免許を「是非(70.8%) + チャンスがあれば(24.6%)」とりたいと答えた者は95.4%あり、「余り関心がない」と答えた者は4.6%であった。資格や免許をとるのは当然のことのようである⁹⁾。資格や免許を「とりたい」と答えた

表2 資格・免許取得希望者の具体的内容

(n=130)

順位	項目	%
1	運転免許	60.5
2	英検	35.5
3	教員	21.0
4	ガイド・通訳	7.3
5	医師	6.5
6	タイプ・ワープロ	5.6
7	簿記・経理	4.0
8	栄養士	2.4
8	司法書士	2.4
9	薬剤師	1.6
9	調理師	1.6
10	幼稚園教諭	0.8

者の具体的な内容を表2に示した。

3.7 働きたい立場

「将来職業をもった場合どんな立場で働きたいか」という問いに対して、「男女の別なく能力に応じて互角に働きたい」と答えた者は62.3%であった。2番目は「余りにしない」の26.2%であった。それらにくらべて「男性主力、女性補佐型で気楽に働きたい」(6.9%)や「仕事はハードでも、女の上司的存在で働きたい」(3.8%)は少なかった。

6割強は「性別に関係なく能力に応じて互角に働きたい」とし、1/4以上は「余りにしない」としていた。このことは3.3で就職に関して女性は不利と感じている者が多いことと関連していると考えられる。

3.8 男女の能力

「男と女の持つ能力は、その発揮の仕方や適した分野がそれぞれ異なると思うか」という問いに対して「異なるところの方が多いと思う」と答えた者は62.3%、「あまり異なるところはないと思う」と答えた者は32.3%であった。

3.7、3.8の結果より、男女の能力は発揮の仕方や適した分野が異なるとしつつも、能力に応じて互角に働きたいと思っていた。「自分の能力をいかして生きる」ことは大卒女性のみでなく学歴に関係なく女性たちが共通に求めている生き方でもあるが、能力をのばす発想が欠けている等、多くの問題を含んでいるという指摘⁹⁾がある。

4 結婚について

4.1 自然なことか

「結婚することは人間として自然なことと思うか」という問いに対して、「ごく(50.8%) + どちらかと言えば(30.8%)」自然なことだと思うと答えた者は81.6%を占めていた。「そう自然なことだとは思わない」と答えた者は4.6%であった。結婚は人間として自然なことと受け入れられていることがわかる。

4.2 女性の場合

「女性の結婚についていろいろな考え方があるが、どう考えるか」という問いに対して、「精神的に安定するから結婚した方がよい」の45.4%をはじめとして、「女の幸福は結婚にある(9.2%)、人間であるから当然(3.8%)」など、結婚を肯定する者が59.2%、他方、「一人だちできれば、あえて結婚しなくてもよい」の34.6%をはじめ、結婚を否定する者が35.4%を占めていた¹⁰⁾。同じ質問を20歳以上の男女に行った調査¹¹⁾によると、「女の幸福は結婚にあるから結婚した方がよい」の30.0%をはじめとして結婚を肯定する者が73.6%、結婚を否定する者が20.8%であり、女性の未婚者の33.4%が「一人だちできれば、あえて結婚しなくてもよい」としていた。神戸女学院高等学部3年生の結婚肯定理由は成人のそれとは順序が異なりまたその割合も低いのであるが、「一人だちできれば、あえて結婚しなくてもよい」は成人女性の未婚者のそれよりも1.2%上回っていた。結婚については婚期までかなりの猶予があり、本人の意志以外の要因があることも見逃せない。

4.3 「男は外で働き、女は家を守る」という意見に

「どちらかといえば反対」と答えた者が46.9%、「どちらかといえば賛成」と答えた者が25.4%、「どちらともいえない」と答えた者が27.8%あった¹²⁾。総理府の世論調査¹³⁾で男は仕事、女は家庭という考え方に同感するかどうか聞いたところ、「同感する方」と答えた者は43.1%、「同感しない方」と答えた者は26.9%、「どちらともいえない」は28.0%となっていた。同じ調査で女性の未婚者は「同感しない方」(35.9%)が「同感する方」(21.6%)を上回っていた。伝統的、保守的な社会通念に対して成人女性の未婚者は考え方が逆転していることがわかる。神戸女学院高等学部3年生は成人の未婚女性の考え方はるかにしのいで先進的であり、半数近くの者が「反対」していた。

4.4 望ましい夫婦の型

「パートナーシップ(53.1%) + 友達夫婦(34.6%)」型で87.8%を占めているのに対し、「亭主関白 + 夫唱婦随、内助の功」型は10.7%であった¹⁴⁾。男女対等

の夫婦像を描いていることがわかる。なおカカア天下型は0%であった。

4.5 けいごとの必要性

結婚前のいわゆる「お茶、お花、お料理、お作法」などを「必要(10.0%) + まあ必要(33.1%)」だと思うと答えた者は43.1%、「必要ではない」とした者は21.6%、「どちらでもよい」は35.4%であった。

4.6 望ましい家庭のあり方

「妻も含めて、家庭みんなの安らぎ、いこいの場」と答えた者が69.2%で圧倒的に多かった。ついで「社会形成のための最小単位(社会生活を営むうえでの原点)」が13.1%、「自己形成し、自己向上をはかる場」が7.7%、「家族どうしの交流の場」が6.2%の順に多かった。「夫や子供にとっての安らぎ、いこいの場」は0%であった。

4.7 女性にとって家庭とは

「家庭という言葉をきいたとき、女性の立場のあり方として最もふさわしいのはどれか」という問いに対して、家庭とは女性にとって「創っていくもの」(63.8%)であり、「守るもの」(10.0%)であって、「まかされたり(3.1%)、入っていくもの(0.8%)」ではないとしていた。

4.6 家庭のありかたで7割弱の者が「妻も含めて、家庭みんなの安らぎ、いこいの場」としておきながら、4.7女性の立場のあり方として「わからない」と答えた者が18.5%もあった。彼女達は年齢的に家庭をイメージとして捉えることができても、それ以上具体的には思い浮かべられないからではないかと思われる。

5 男性観・女性観について

5.1 好ましい男性像

「尊敬できる人」(34.6%)、「頼りがいのある人」(26.2%)、「理解のある人」(23.8%)と答えた者は84.6%、「威厳、協調性、決断力のある人」と答えた者は6.9%であった。これらは4.4夫婦関係の型のパートナーシップ型や友達夫婦型

に呼応するものであろう。

5.2 みられたい女性像

「男性からどのような女性としてみられたいか」という問いに対して、「かわいい (29.2%)、やさしい (15.4%)、個性的な (14.6%)、しっかりした (12.3%)」女にみられたい (71.5%) が、「色気のある (0%)、知的な (4.6%)、かっこいい (6.9%)、清楚な (8.5%)」女にはみられたくない (20.0%) そうである。

5.3 魅力を感じる女性の姿 (いくつでも)

用意された項目の中で多かったのは「仕事にうち込む姿」(40.8%)、「家庭を持ちつつ働く姿」(33.1%)であった。つぎに「家事にうち込む姿」、「育児にうち込む姿」、「男性と肩をならべて仕事をする姿」と答えた者がそれぞれ 26.9% あった。その他「家庭を守る姿」が 24.5%、「社会奉仕にうち込む姿」が 17.7% となっていた。つまり家事、育児などの家庭型と答えた者が 100%、仕事型と答えた者が 67.7%、家庭を持ちつつ働く折衷型と答えた者が 33.1% という案配で、どの項目も肯定されていることがうかがえる¹⁵⁾。それらは身近な女性が生活のいろいろな場面で活躍している姿をほうふつさせるが、同時に焦点を一つに絞りきれない女子高校生の姿を浮かび上がらせるのである。

5.4 女性に生まれて

「女性として生まれてきてよかったと思うか」という問いに対して、59.2% の者が「女性でよかった」と肯定的であり、「男性として生まれたかった」の 9.2% をはるかにしのいでいた。総理府の世論調査¹⁶⁾によると、もし生まれ変わることができるとしたらという設問に対する答えは男性は「男に生まれたい」が 8割以上を占めており、女性は「女に生まれたい」が過半数 (53.7%) を占めていたが「男に生まれたい」と答えた者も 29.7% となっていた。女性で「女に生まれたい」は他の年代にくらべて 20歳代 (58.9%)、30歳代 (58.8%) に特に多かった。このことは 3年前の同調査¹⁷⁾でも同じ傾向を示していた。神戸女学院高等学部 3年生は成人女性とほぼ同じ意識をもっているといえる。

6 女性のライフパターンについて

女性の生き方を専業主婦志向から有職業志向まで表3のような8タイプに分類し、望ましいと思うものを一つ選択させた。結果を次のような女性の職業経歴型¹⁸⁾に分類した。()内は「女性のライフコース研究会」¹⁹⁾のデータであり現代女性の動向とした。[]内は成人男女を対象とした世論調査²⁰⁾のデータであり社会通念とした。

a) 未就業型：(4.9%)、[4.3%]

卒業後社会で働く経験のないまま結婚し、専業主婦になる型を選択した者は

表3 女性の望ましいライフパターン

(n=130)

項 目		%
1	卒業→結婚→出産→子育て→専業主婦	3.8
2	卒業→就職→退職→結婚→出産→子育て→専業主婦	13.1
3	卒業→就職→結婚→共働き→退職→出産→子育て→専業主婦	6.9
4	卒業→就職→退職→結婚→出産→子育て→再就職→共働き	6.9
5	卒業→就職→結婚→休暇又は退職→出産→子育て→復職又は再就職→共働き	33.1
6	卒業→就職→結婚→共働き→出産→子育て→共働き	4.6
7	卒業→就職→結婚→共働き→子供不要	6.2
8	卒業→就職→未婚のまま	19.2
9	卒業→その他	0.8

注 1) 卒業する学校の種類は問わない。

2) 就職の形態は問わない。

3) 専業主婦とは主婦業だけに専念している場合をいう。

3.8%あった。神戸女学院高等学部3年生の希望も、現代女性の動向も、社会通念も極めて低い値であり、学校卒業後は就業することが一般化しているといえる。女性のライフコース研究会²¹⁾は「最終学校終了直後就業することが一般化していく過程でこのパターンは減少の一途をたどり、20歳代では0.8%と皆無に近くなっている。今後とも職業経験の全くないライフコースをとるものは少ないと思われる」とのべている。

b) 結婚・出産退職型：(20.8%)、[26.3%]

i) 結婚退職グループ：(2.3%)、[13.7%]

退職後結婚し専業主婦になる型を選択した者は13.1%であった。結婚退職を望む神戸女学院高等学部3年生の割合が現代女性よりも多く、社会通念とほぼ同じ割合であった。このことから意識として両親等の考え方に影響されている側面がうかがえる²²⁾。

ii) 出産退職グループ：(18.5%)、[12.6%]

出産まで就業し、出産を機に退職して専業主婦になる型を選択した者は6.9%であった。学校卒業後出産退職を志向する者の割合は、現代女性の動向や社会通念の値よりもかなり低かった。

神戸女学院高等学部3年生は出産退職型よりも結婚退職型を志向しており、全体として現代女性の動向と同じ選択傾向を示していた。

c) 中断再就業型：(32.3%)、[48.0%]

i) 結婚退職・子無し後再就職グループ：(2.8%)

本グループの調査項目は設けられていない。

ii) 結婚退職・育児期後再就職グループ：(—)

本グループの選択率は6.9%であった。

iii) 出産退職・育児期後再就職グループ：(29.5%)

本グループの選択率は33.1%で、現代女性の動向よりもやや高かった。

中断再就業型は、現代女性の動向として3割強、社会通念上は5割弱が志向しているが、神戸女学院高等学部3年生の選択率は両者の中間の4割であっ

た。他方で中断再就業型志向は30、40歳代の男性ならびに20、30歳代の女性に多く、また未婚成人女性の50.7%が支持しているという調査²³⁾がある。

d) 就業継続型：(39.1%)、[14.5%]

i) 結婚・子有りグループ：(21.9%)

本グループの選択率は4.6%で、現代女性の動向にくらべて極めて低かった。

ii) 結婚・子無しグループ：(4.2%)

本グループの選択率は6.2%で、現代女性の動向にくらべてやや高かった。

iii) 未婚グループ：(13.0%)

本グループの選択率は19.2%²⁴⁾で、現代女性の動向にくらべて高かった。

就業継続型にみられる現代女性の動向は39.1%であり、神戸女学院高等学部3年生の選択率は30.0%で現代女性の動向よりも低かった。社会通念上は性別、年齢別に意識や実態は異なっているが、他の年代にくらべて20歳代男女の就業継続型選択率は高かった²⁵⁾。

神戸女学院高等学部3年生の63.7%の者が「子育ては自分の手で」と希望していた。今後の生き方として「家庭か(23.7%)職業か(19.2%)」の二者択一的なものではなく「家庭も職業も」(50.8%)の生き方がうかがえる。それは同時型(10.8%)ではなく継起型(40.0%)であり、しかもより多く理想とされていることは注目に値する。全体として90.0%の者が学校卒業後、家庭型ではなくて何らかの職業についていたいと希望したのである。このことは学力の高低や希望する最終学歴に関係なく札幌市内の女子高校生においてみられる傾向¹⁾であり、また現代女性の動向²⁵⁾でもある。

女性の職業観の国際比較²⁶⁾によると、どちらかといえばスウェーデンやアメリカは職業型(55.0%、42.6%)として、またイギリスや西ドイツは継起型(61.8%、52.7%)として分類できる。その中で日本は継起型に位置づけられるものの、他国にくらべてその割合はかなり低く(43.5%)、また他国(5.6～20.3%)にくらべて家庭型の占める割合が高い(32.8%)という特徴がみられる。それにもかかわらずわが国のあらゆる階層においてライフパターンの選択

が中断再就業型・継起型に集中していることは高等教育のあり方をはじめ、女性の雇用制度や雇用慣行を考える上で大きな示唆を与えている。

その上、雇用職業総合研究所²⁷⁾は「旧来のM字型のくぼみがしだいに浅くなってきており、女性男性ともに共通した新しい職業観、社会観に立って、自らの価値観に基づいて、職業能力の伸長と発揮の機会を求め、その条件を整備することが必要である」としている。女性男性ともに新しい時代にふさわしい新しい生き方が求められているのである。

まとめ

1987年10月に神戸女学院高等学部3年生130名を対象に、高校生活、進路、職業観、結婚、男性観・女性観、女性のライフパターンに関するアンケート調査を行った。

- 1) 高校生活には8割の者が満足していた。
- 2) 全員が進学を希望していた。9割の者が4年制大学以上の学歴を希望していた。
- 3) 望ましい仕事として、7割の者が「自分の能力が思いきり発揮できる仕事」をあげていた。つきたい職業は4割の者が「わからない」であったが、残りは教員・研究員などの専門的技術や資格、経験が評価される職業であった。また6割の者が性別に関係なく能力に応じて互角に働きたいとしていた。
- 4) 8割の者が結婚を肯定していた。望ましい夫婦の型はパートナーシップ・友達夫婦型であった。
- 5) 好ましい男性像・女性像を描かせた。女性として生まれてきてよかったと答えた者は6割であった。
- 6) 一番望ましいライフパターンは中断再就業型・継起型(40%)で、出産を機に退職する型(33%)であった。つぎに就業継続型(30%)で、未婚のまま働く(19%)というものである。64%の者が子育ては自分の手だと思う。

っていた。9割の者が学校卒業後には何らかの職業につきたい、3割の者が一生職業についていたいと考えていた。

本調査を行うにあたり、調査用紙使用の便宜を与えて下さいました静修短期大学の古崎和代教授に御礼申し上げます。また調査にご協力下さいました神戸女学院中高部の坂倉晴恵、北田京子両教諭に御礼申し上げます。

引用文献および註

- 1) 古崎和代、関 道子：女子高校生の生活意識と将来像およびその意味について、静修短大研究紀要、19、p. 133～145（1988）
- 2) 札幌市内の高校についてみると、A群の場合、父親は「高等学校卒」が41.8%、「大学卒」が38.3%で、母親は「高等学校卒」が56.7%、「短大・高専卒」が12.1%、「中学校卒」が11.3%であった。全体群では父親は「高等学校卒」が41.9%、「大学卒」が25.5%、「中学校卒」が21.2%、母親は「高等学校卒」が51.1%、「中学校卒」が25.0%であった。
札幌市内の高校のA群と全体群の両親の学歴に有意差は認められなかったが、神戸女学院高等学部の両親の学歴はそれぞれ0.1%有意水準で札幌市内高校のA群ならびに全体群の両親よりも高学歴であった。
- 3) 神戸女学院一貫教育常置委員会、神戸女学院調査室：中高部生アンケート結果表 1980年6月調査（1980）
- 4) 神戸女学院高等学部とA群を比較すると、神戸女学院高等学部はA群よりも「校風や教育方針がしっかりしている高校」を選択する者が多かった（ $p < 0.001$ ）。他方神戸女学院高等学部はA群よりも「自分自身の学力を考慮」し、「大学入試に有利な高校」で、「通学に便利な高校」を選択する者が少なかった（それぞれ $p < 0.001$ 、 $p < 0.001$ 、 $p < 0.05$ ）。これらの諸項目は私立高校と公立高校の特徴をよく表していると考えられる。
- 5) 神戸女学院高等学部は全体群よりも高校生活に「満足している」者が多く（ $p < 0.01$ ）、「不満ないしかなり不満」の者が少なかった（ $p < 0.01$ 、 $p < 0.05$ ）。
- 6) 神戸女学院高等学部ならびにA群は全体群よりも「就職進学」を希望する者が少なく（それぞれ $p < 0.001$ ）、他方「進学」を希望する者が多かった（それぞれ $p < 0.05$ ）。
- 7) 神戸女学院高等学部は全体群とA群よりも（いずれも $p < 0.001$ ）、またA群は全体

神戸女学院高等学部3年生の生活意識について

- 群よりも ($p < 0.05$)、「高専・短大まで」の進学希望者が少なかった。神戸女学院高等学部ならびに A 群はそれぞれ全体群よりも「4 年制大学まで」の進学希望者が多かった (いずれも $p < 0.001$)。神戸女学院高等学部は全体群よりも、また A 群よりも「大学院まで」の進学希望者が多かった (それぞれ $p < 0.001$ 、 $p < 0.05$)。
- 8) 神戸女学院高等学部の方が全体群よりも複数以上の資格や免許を取りたいと希望していた。
 - 9) 神田道子：これからの女性の生き方；吉田 昇、神田道子編、現代女性の意識と生活、NHK ブックス 237、p. 247～257 (1984) 日本放送出版協会
 - 10) 神戸女学院高等学部は全体群よりも「女の幸福は結婚にあるから結婚した方がよい」とする者が少なかった ($p < 0.01$)。
 - 11) (総理府) 内閣総理大臣官房広報室：女性に関する世論調査 世論調査報告書 1987 年 3 月調査、p. 54～58 (1987)
 - 12) 神戸女学院高等学部は全体群よりも「男は外で働き、女は家を守る」という意見に「どちらかといえば賛成」とする者が少なかった ($p < 0.05$)。他方神戸女学院高等学部は A 群ならびに全体群よりも「男は外で働き、女は家を守る」という意見に「どちらかといえば反対」とする者が多かった (いずれも $p < 0.01$)。
 - 13) (総理府) 内閣総理大臣官房広報室：女性に関する世論調査 世論調査報告書 1987 年 3 月調査、p. 42～47 (1987)
 - 14) 神戸女学院高等学部は全体群よりも「パートナーシップ型」を望ましいとする者が多かった ($p < 0.01$)。
 - 15) 神戸女学院高等学部は A 群ならびに全体群よりも「育児にうち込む姿、家庭を守る姿、夫や男性につくす姿」に魅力を感じる者が少なかった (いずれもそれぞれ $p < 0.01$) が、「男性と肩をならべて仕事をする姿」に魅力を感じる者が多かった (いずれもそれぞれ $p < 0.05$)。また神戸女学院高等学部は全体群よりも「仕事にうち込む姿」に魅力を感じる者が多かった ($p < 0.05$)。
 - 16) (総理府) 内閣総理大臣官房広報室：女性に関する世論調査 世論調査報告書 1987 年 3 月調査、p. 51～53 (1987)
 - 17) 内閣総理大臣官房広報室：婦人に関する世論調査 世論調査報告書 1984 年 5 月調査、p. 29～30 (1984)
 - 18) 鎌田とし子編著：転機に立つ女性労働—男性との関係を問う— (1987) 学文社
 - 19) 経済企画庁国民生活局編：新しい女性の生き方を求めて—長寿社会における女性のライフコース—、p. 152 (1989) 大蔵省印刷局
 - 20) (総理府) 内閣総理大臣官房広報室：女性に関する世論調査 世論調査報告書 1987 年 3 月調査、p. 22～27 (1987)

神戸女学院高等学部3年生の生活意識について

- 21) 内閣総理大臣官房広報室：婦人に関する世論調査 世論調査報告書 1984年5月調査、p. 48 (1984)
- 22) 神戸女学院高等学部は全体群よりも結婚退職を希望する者が少なかった ($p < 0.01$)。
- 23) 内閣総理大臣官房広報室：家族・家庭に関する世論調査 世論調査報告書 1986年3月調査、p. 56～58 (1987)
- 24) 神戸女学院高等学部はA群ならびに全体群よりも未婚就業継続志向率が高かった (いずれも $p < 0.01$)。
- 25) 内閣総理大臣官房広報室：婦人に関する世論調査 世論調査報告書 1984年5月調査、p. 154 (1984)
- 26) 内閣総理大臣官房広報室：女性に関する世論調査 1982年調査 (1983)
- 27) 雇用促進事業団 雇用職業総合研究所編：女子労働の新時代 キャッチ・アップを超えて、p. 11 (1987) 雇用促進事業団 雇用職業総合研究所

Summary

Life Style Attitudes of Senior Year High School Girls at Kobe College

Keiko Okamoto

In October, 1987, we surveyed 130 senior year high school girls at Kobe College concerning school life, future after graduation, views on career, marriage, men and women, and women's life style by questionnaire. Here are some interesting findings. 1) Eighty percent of them were satisfied with high school life. 2) All of them wanted to pursue further studies after graduation. Ninety percent wanted to graduate from a 4-year college over. 3) Seventy percent wanted to pursue a career in which they could use their abilities the best. Forty percent did not know what career they wanted to pursue. The rest wanted to be teachers or research workers doing work that requires skill, a degree and experience which are evaluated highly. Sixty percent of the students wanted to be able to work equally as men without any sexual harassment. 4) Eighty percent considered marriage positively. The ideal marriage in their view was a marriage as a partner or friend. 5) The favored male and female views were drawn. Sixty percent of them were satisfied as to have been born female. 6) The most accepted blueprint for life was temporary leave from career and return (40%), and terminating career life with prospect of pregnancy (33%). This was followed by continuation without career interruption (30%). Nineteen percent concluded that they would like to continue working without marrying. Sixty-four percent considered raising children. Ninety percent of them wanted to pursue some kind of career after graduation. Thirty percent wanted to continue work for life.